

55. 「信頼する力」

2014.5.1 遠藤清賢

子ども達の信頼する力は当然ですが、信頼されるという体験から育まれるのだと思います。自分が信頼されている経験の積み重ねによって、他者を信頼する力が具えられるということです。乳幼児期は母親や家族、その他の養育者にたいして子どもたちは生まれながらに絶対的な信頼感を持っています。その子ども達の生まれながらに備えられている心に、無条件の愛情で応えなければなりません。乳児期において、子どもたちとこのように過ごすことは親としての努めです。そして1歳になるころまでには早寝早起きや朝昼晩の食事などの規則正しい生活リズムによって健康な身体を持つように成長を支えます。愛情によって支えられた精神と規則正しい生活習慣によって育まれた身体が揃って「信頼する力」を獲得する土台が出来上がるのだと思います。

子ども達が他者を信頼する力を獲得するためには、まず友達との遊び中で育まれます。初めは信頼とか思いやりなど関係なくただ一緒にいて、物を獲り合ったり、真似し合ったり、意味のない声を掛けあったりすることから始まるのですが、触ったり、じゃれ合ったりしながら、お互いの存在を確認することによって、徐々に心の交流へと変化してきます。好きとか、嫌いとか、気が合うなどの関係だけではなく、自分の思いと友達の思いが一緒になった時、たとえば同じおもちゃで遊びたい、それぞれが持っているおもちゃを交換したい等、そのような時に信頼感が芽生える切っ掛けになるのだと思います。それを自分が信頼している大人によって「楽しいね。」「仲良くして嬉しいね。」等の声掛けと励ましによって関係がさら発展し友達という関係ができあがります。

子どもが、3歳を過ぎ4歳くらいになって、ある程度自立して行動できるようになると大人の目から見ていけないことをすると、失敗を繰り返すようになってきます。このとき大人として子どもを「自分の子はこんなことはしない、こんな悪いことはしない。こんな失敗はしない。」等、大人の一方的な思いだけで子どもの行動を規制してしまうと、子どもは大人を信頼したいという気持ちに戸惑いが出てくるのです。私たち自身、成功して成長できたのではなく、多くの失敗を繰り返し、多くの人たちにたくさん迷惑を掛け、それを許されて成長できたという方が正しいのではないのでしょうか。従って、上手にできるとか、大人の思いの通りに行動できるように指導することが信頼する力を獲得させるのではなく、多くの失敗を許される経験が信頼する力を獲得できるということを私たちは確認しなければなりません。子ども達に適切な行動を指導することより、たとえばできなかったとしても、多くの迷惑をかけてしまったとしても、その失敗を許し、やり直すことができる行動力を支え、励ましてあげることが子どもとの信頼という絆を強め、子どもが他者を信頼する力を育むことができるのだと思います。100回の失敗があってもその中でただ1回だけの成功を、共に心から喜びあえる関係が本当の「信頼」を育むことができるのだと思います。



《ひじき入り中華サラダ》 5人分の材料

ハム 2枚、きゅうり 2本
もやし 50g、芽ひじき(乾) 5g
緑豆はるさめ(乾) 15g
ごま油 大さじ1強
醤油 小さじ2

作り方

- ① 芽ひじきはお湯で戻し、ゆでる。はるさめもゆで、食べやすく切る。ハム、きゅうりは千切りにする。
- ② もやしをゆでる。
- ③ ボウルに①の材料とゴマ油、醤油、で味付けし和える。

